

＜目的＞江戸時代には着物や帯は財産として考えられ何度も仕立て替えをし、また様々な形で利用されてきた。今回、江戸時代のものと思われる裂と白羽二重とで仕立てられた着物を引き解き、裂・模様・出来上がり寸法等を調査考察し、この着物の当初の製作年代の判定と復元を試みることを目的とした。

＜方法＞着物を解体し、模様のつながり、布目方向、汚れ跡、縫い目跡、折れ山、模様のついてない部分等を手掛かりとして復元を行なう。そして着物を模様、技法、復元された出来上がり寸法を文献や、実物遺品等の資料と比較調査し判定する。

＜結果＞着物に使用されていた裂は、薄浅葱縮緬地に橘と君が代の文字が、刺繍と摺り匹田の技法で表されている。橘の立ち木模様に加える着物は18世紀に多く見られ、特に「君が代は」の使用は江戸時代後期、19世紀以降にしばしば用いられている。現存の同種模様の着物は、江戸時代後期の製作とされるものに集中している。技術面では、摺り匹田の技法は現存遺品からは18世紀、江戸時代後期の製作とされる着物に似通ったものがあり、刺繍の技法も江戸時代中期から後期のものではないかと考察できた。そして復元から得た出来上がり寸法は、現存の19世紀の作品と考えられる着物の寸法に近いことが分かった。これらのことから「薄浅葱縮緬地橘君が代模様小袖」の製作年代は18世紀後半から19世紀初めごろと推定することができた。また解体・復元の作業を通し、この着物が途中何度か仕立て替えられては大切に使用され、着物の持つ特性を生かした生活の知恵、物を大切に作る昔の人の生活感を改めて認識した。